

はじめに

# 教室でできる特別支援教育

## 「講演」誌上再現

前半



名城大学大学院 大学・学校づくり研究科 准教授 曾山和彦

### 曾山和彦

そやま かずひこ\*群馬県生まれ。東京学芸大学卒、秋田大学大学院修士課程修了、中部学院大学大学院博士課程修了。東京都、秋田県の養護学校教諭、秋田県教育委員会指導主事、管理主事を経て現職。社会福祉学博士。学校心理士。上級教育カウンセラー。編著書に「学習に苦戦する子」(図書文化)、「気になる子への対応術」(教育開発研究所)、著書に「時々「オニの心」が出る子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング」(明治図書)「すぐに役立つ!学級経営の秘訣 第1巻 子ども集団が動く学級づくり」(教育開発研究所)ほか多数。

前号まで「気になる子ども、まわりの子ども安心な学級経営」と題し、4回にわたる連載の機会をいただきました。その後、読者アンケートを通して、「気になる子どもを含めた学級づくりのノウハウを知りたい」「全国の実践例をもっと教えてほしい」等の声が多く届きました。そこで、少しでも読者のみなさんのニーズに応えるため、本号から3回シリーズで、「教室でできる特別支援教育」をテーマにわたしの考えをお伝えします。

「なぜ、このテーマなのか」。それ

はい、わたしに届く講演依頼の中で最も多いテーマだからです。それだけ全国の先生方の興味関心が高いということであり、また「どうすればいいのかわからない」という悩みも尽きないということなのでしょう。

わたしも18年間、担任として子どもたちの学習・行動・対人関係面での指導・支援をする中で、悩みが消えたことはありません。しかし、そうした悩みも、いまではすべからず懐かしい思い出に変わっていることに気づきます。子どもとのかかわりをあきらめなかったことが、「思い出の開花」につながったのだ

と思います。

いま、目の前の子どもたちに、先生方各自の「引き出し」にあるさまざまな指導・支援の知識や技術を使ってみてみてみましょう。子どもが「笑顔になった、伸びた」と感じる瞬間に、きつと出会えます。先生方がこれまで学び、経験して身につけた知識や技術に自信をもちましょう。

わたしは本号から伝えることの中には、「それならいつもやっている」ということがたくさんあるはずですが、先生方の毎日を応援するのがhio\*yumeの基本「ハ



## I 実践知を学ぶ・真似る

今年度は、特別支援教育のスタートから5年目です。これまでに全国各地の先生方が試行錯誤を重ねた実践の知見が積み上げられてきています。わたしは巡回訪問等により多くの学級を見て回る中で、「他校に伝えたい」と

感じる実践に出会ってきいています。はじめからオリジナルの実践を目指す必要はありません。まずは、優れた成果を上げている各地の実践を「学ぶ真似る」ことから始めてはどうかでしょうか? 例に挙げたのは、A小学校「どの子どもでもできる授業づくり三つの原則」**資料1**、B小学校「人づきあいのコツを学ぶSSTタイム」**資料2**、C中学校「全ての学級が取り組むアサーションワーク」**資料3**の実践です。

いずれも、気になる子が在籍する学級での実践であり、「教室でできる特別支援教育」のモデルとなります。

## II 現代の子ども像と教室でできる特別支援教育

人とかかわり体験が不足している現代の子どもは、「ソーシャルスキルと自尊感情が落ち込んでいるのではないか」と考えられます。

人とかかわるコツを知らず、自分を否定的に評価しがちな子どもが多く在籍する学級で、気になる子の存在がクローズアップされるのは当然といえます。気になる子に対して、否定的な言葉を投げかける子どもが多ければ、気になる子の言動がよりマイナス方向にふく

れあがり、学級全体の雰囲気は悪くなります。

それ故、いま、通常学級において必要なのは、気になる子、および学級集団の実態を把握したうえで、学級すべての子に、「人づきあいのコツ(技)」を教える「自分OKと言えようにする」ことであり、それが「教室でできる特別支援教育」であると考えます。

気になる子だけに焦点を当てた指導では、通常学級における特別支援教育は機能しません。

### 優れた成果を上げている実践例

資料1

#### A小学校の実践 「どの子どもでもできる授業づくり 三つの原則」

- 授業規律の定着
- リズムとテンポ
- 1指示1動作

ユニバーサル・普遍的 個への支援が全体の支援につながる

気になる子ども含む30名弱の子どもたちが45分集中して学ぶ姿に、「ああ、これが知識生活黄金時代ということか」と感動。担任の先生が練りに練った「作戦」に、子どもたちが心地よく乗っている...そんな印象を受けた。(小1授業参観時の、私の観察記録)

資料2

#### B小学校の実践 「人づきあいのコツを学ぶSSTタイム」

- 全学年が年間を通じて、毎週金曜の朝の短学活15分を使い、SSTに取り組む。

ソーシャルスキル・トレーニング(対人関係のコツを教える) してみせて 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は育たず

SSTタイム継続により、授業中の子ども同士のかかわり方もとてもよくなった。自分の考えに固執せず、柔軟な考えをもつ子どもが増えてきた。(教師による行動観察記述)

拙著「時々「オニの心」」(曾山、2010)に詳細を掲載

資料3

#### C中学校の実践 「全ての学級が取り組むアサーションワーク」

- テーマは「上手な断り方」

アサーション 自他尊重のコミュニケーションスタイル さわやかな自己主張

気になる生徒も含め、全学級の生徒がグループワークやロールプレイに取り組む姿に驚いた。最後に、校長先生から頼もしい発言もあり。「国語・数学の力は秋田にも負けません!」(参観時の、私の観察記録)

資料4

#### 現代の子ども像と教室でできる特別支援教育

現代の子どもは、ソーシャルスキル、自尊感情が落ち込んでいるのではないか

気になる子の存在が、以前よりクローズアップされてきたのではないか

気になる子、及び学級集団の状況を理解した上で、次の2点の指導・支援が大切ではないか

1. 人づきあいのコツ(技)を教える
2. 自分に「OK!」と言えるようにする

気になる子どもには、より機会をとらえて



Iで紹介した「授業づくり三原則」のA小学校、「SSTタイム」のB小学校も、学級集団の状況を理解するためにQ-Uを活用しています。

わたしたち教師は、日常的な観察から個々の子どもや学級集団の状態を把握することに努めます。しかし、行動、表情として

外に現れたものを見取る観察だけでは、子どもや学級集団の状態を真に把握することが難しいケースがあります。「顔は笑って心で泣いている」子どもがいます。そうした子どもの内面、あるいは学級集団の内面に潜むものをより正確に把握するには、教師は複数の観点をもつておくこ

### 気になる子の理解

資料5

#### よりよい実践に向け、はじめの一步 ～気になる子を理解する～

発達障害について学び、理解することは不可欠。家庭環境に関する状況理解も不可欠。

＜常に心の中で繰り返してきた「二つの言葉」＞  
・うまく指導してもらえなくてもいい。でも、子どものことは理解してほしい。(ある保護者)

・教師は専門家である。教育を行う者が、教育を行う子どもについて無知のまま教壇に立つことは、子どもに失礼極まりない。(杉山登志郎)

ドナ・ウィリアムズ(※1)等の自伝を読んでほしい

資料6

#### 何故、障害理解が大切なのか 1

～文部科学省調査結果(2002)より～

明らかな知的遅れがないにもかかわらず、学習や行動面で著しい困難を示す児童生徒は小・中学校の通常学級に6.3%在籍する

通常学級担任への質問紙調査結果。質問項目は、LD、ADHD、高機能自閉症に観察される典型的特徴から構成。教師が必ず出会う児童生徒である。

資料7

#### 何故、障害理解が大切なのか 2

～近年の発達障害児者による犯罪報道から～

・レッサーバンド帽青年事件(2001)・同級生女児事件(2004)・タリウム事件(2005)  
・エリート少年自宅放火事件(2006)・・・等

・少年のIQは136  
・少年は精神鑑定で「広汎性発達障害(PDD)」と指摘されている  
・父親の叱責が激しくして自宅に放火

PDDは、障害特性の一つとして、「言葉の意味をそのまま受け取る(字義性)」傾向が指摘されている

障害が問題や事件を起こすのではなく、周囲の理解・対応の不十分さが問題や事件の呼び水に・・・

資料8

#### よりよい実践に向け、次の一步 ～学級集団の状態を理解する～

学習規律(ルール)が定着している学級には「安心」が生まれ、その安心をベースに、集団内に「ふれあい(リレーション)」が生まれる。「安心・ふれあい」のある学級は児童生徒の居場所となり、満足度の高い学級である。

Q-U(河村、1999)の「学級満足度尺度」は、ルールとリレーションの2軸で児童生徒の学級満足度を測定する尺度(※4)

A、B小(Q-U導入)の学級満足度は、全国平均よりも高い。気になる子が自然に学級に溶け込んでいる。

### III 実践へのはじめの一步

～気になる子の理解

教室でできる特別支援教育実践へのはじめの一步は、気になる子の理解から踏み出します。

資料5

文部科学省の調査で「気になる子の在籍率6.3%」(※2)という数字(資料6)、父親の不用意なひと言が引き金となった「少年による自宅放火事件」(資料7)等を念頭に、今や発達障害について「知らないでは済まされない」といえます。

「個への支援が全体の支援につ

ながる」というユニバーサルデザインによる実践を進めるには、特性上、気になる子にはどのような配慮が必要なのかを把握しなければなりません。そのために、LD(学習障害)やADHD(注意欠陥/多動性障害)等の障害に関する基本理解が不可欠です。

わたしには忘れられない二つの言葉があります。一つは、「子ども」のことを理解してほしい」といふ保護者の言葉、もう一つは、「教師が無知のまま教壇に立つことは子どもに失礼である」といふ杉山登志郎氏の言葉です。(※3)

「子どもとのかかわりを通して

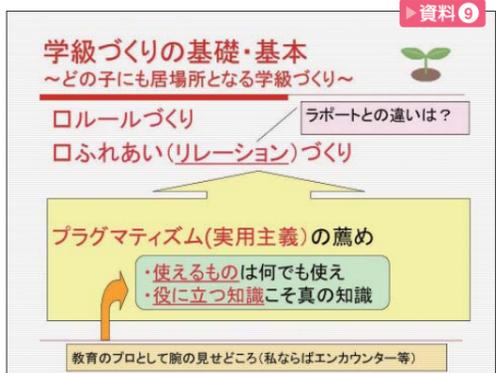
### IV 実践へのはじめの一步

～学級集団の理解

教室でできる特別支援教育の次の一步は、学級集団の状態理解

その子を理解すればよい。難しい理由は必要ないと話す先生が稀にいます。しかし、そうでしょうか。わたしは、「体験実践だけでは通用しない」と思っています。教室でできる特別支援教育を進めるために、理論・技法も学んでいくこと。それが、「教育のプロ」である教師の職業倫理でしょう。

資料9



とが必要と考えます。その観点の一つが、子ども自身の自己評価尺度であるQ-Uです。わたしも担任をしていたときにQ-Uを活用していましたが、短時間で実施でき、個々の子ども、学級集団の状況がより正確に把握できたという実感をもって使っています。ただし、その際、気をつけたいことがあります。「一番は行動観察。データは横に連れて歩く」ということです。

学級づくりの基礎・基本は、ルールづくりとふれあいづくりです。(資料9)

「学級がどの子にも居場所とな

資料10



るにはルールとふれあいが必要」という河村茂雄氏の指摘(※5)は、学級担任経験者であれば「確かに」と納得がいくものではないでしょうか。

「人間の上位欲求は下位欲求が部分的にせよ満たされて初めて発生する」というマズローの欲求階層説(資料10)によれば、まずは「安全・安定」欲求に応えるルールづくり、次いで「所属・愛情」「自尊・承認」欲求に応えるふれあいづくりを、という説明が可能となります。

担任は新年度開始直後、学級ルール定着に向け、さまざまに心

【参考文献】※1 ドナ・ウィリアムズ「自閉症だったわたしへ」新潮文庫 2000年発行  
※2 文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する実態調査」2002年  
※3 杉山登志郎「アスペルガー-症候群と高機能自閉症 青年期の社会性のために」学習研究社 2005年発行

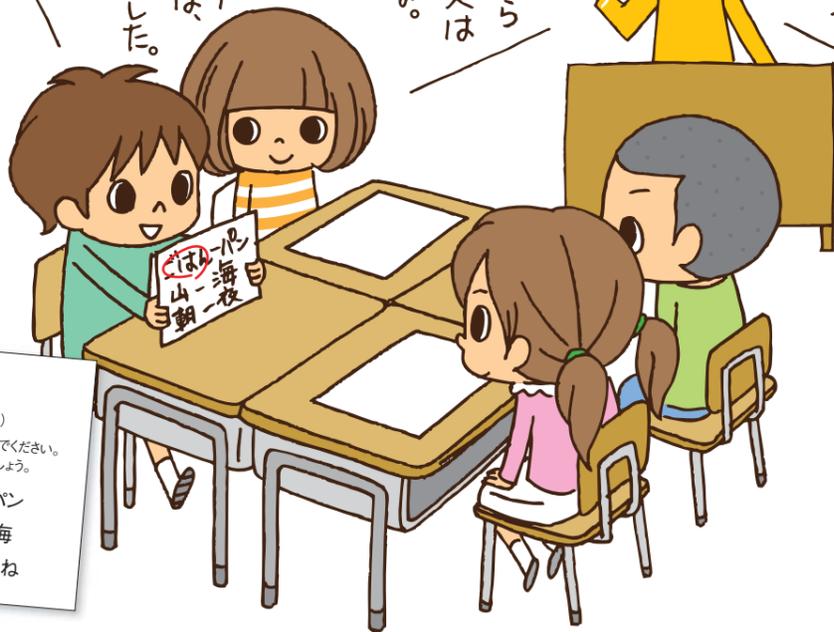
※4 河村茂雄「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U実施・解釈ハンドブック」図書文化 1999年発行  
※5 河村茂雄「データが語る①学校の課題」図書文化 2007年発行  
※6 深沢和彦「特別支援対象児の学級適応感と学級状態との関連」(河村茂雄・高島昌之 編「特別支援教育を進める学校システム」)図書文化 2007年発行

「どっちを選ぶ?」

「ごはんとパンでは、ごはんを選びました。なぜならば〇〇だからです。」

「うなずきながら聴くと話す人は安心しますよ。」

「友だちが話をしているときにはまわりの人は静かに聴きましょう。」



資料① カード例

**どっちを選ぶ?**

名前( )

☆あなたの好きな方をえらび、丸で囲んでください。  
選んだ理由も簡単に考えておきましょう。

1	ごはん	—	パン
2	山	—	海
3	ひこうき	—	ふね

をくたきます。また、自分と子ども、子ども同士のふれあい促進に向け、同様に心くたきます。年度当初のふれあいは、まだ出会ったばかりの関係であり、プラスとプラスの感情交流(「ラポート」)の段階といえます。このラポートは、かわり体験を重ね、プラスもマイナスも含めた感情交流(「リリーション」)、つまり、ホッネの交流ができる段階へと深まります。

教師は、ルールとふれあい促進に向け、どのような理論・技法を用いてもよいでしょう。「使えるものは何でも使え」役に立つ知識こそ真の知識」という骨子をもつプラグマティズム(実用主義)で子どもの前に立つてみてはいかがでしょうか。

わたしがいま、「教育のプロ」としての腕を見せろと言われれば、真っ先に使う理論・技法がエンカウンター&ソーシャルスキルトレーニングです。両者は、わたしにとって、使い勝手がよく、役に立つ知識ということなのです。

V 学級づくりの

実践テクニク

では、「こ」で「わたしの腕の見せどころ」、ルールとふれあい促進に活用できる演習を紹介します。「質問ジャンケン」と「どっちを選ぶ?」です。

演習「質問ジャンケン」

このエクササイズは「自我理解」がねらいです。

次のような手順を進めます。

- ①ペアになった児童同士でジャンケンをし、勝った人が質問項目

資料②

から一つだけ相手に質問する。

②負けた人は簡単に答える。どうしても答えにくいものはパスもOKとする。

このエクササイズは、先生が、「ペアで使う時間は30秒です。用意はじめ……そこまで」とテンポよくリードするとよいでしょう。このエクササイズを繰り返しの会等の時間を使いながら繰り返して実施した先生から、「お互いのこ

とが少しずつ理解し合え、男女の間や気になる子に対する「壁」が薄くなったように感じます」という声が届きました。

「30秒」という時間枠にも意図があります。あつという間に終わる時間だからこそ、「この人のこと、もつと知りたい」という思いが生まれる。「この人のこと、何となく苦手」であってもゲーム感覚でかわることができるといことです。

演習「どっちを選ぶ?」

この演習は「話し方聴き方の

「質問ジャンケン」



資料③ 質問項目例

- 1.好きなスポーツは?
- 2.好きな食べ物は?
- 3.よく見るテレビ番組は?
- 4.行ってみたい外国は?
- 5.好きな勉強は?
- 6.今、いちばんほしいものは?
- 7.苦手なものは?

習得」がねらいです。

次のような手順を進めます。

- ①カード(資料④)に示された「ごはん・パン」などの二つの言葉から自分が好きな方を一つ選んで丸で囲み、選んだ理由も簡単に考える。

②3、4人がグループになり、ひとりずつ順番に選んだものを紹介し、理由も説明する。「ごはんとパンでは、ごはんを選びました。なぜならば〇〇だからです」。

この演習を進める際に、先生は、「友だちが話をしているときに

は、まわりの人は静かに聴きましょう。うなずきながら聴くと話す人は安心しますよ」などと、説明するとよいでしょう。

この演習を朝の会などの時間を使いながら繰り返して実施した先生から、「授業中、自分の考えに固執することなく、柔軟な考えをもつ子どもが増えました。話し方や聴き方を学ぶにはとてもいい演習です」という声が届きました。子どもたちの発達段階などに合わせ、どのような「二択」の言葉を用意するかなど、先生方の腕の見せどころです。なお、拙著で学校現場のSST(ソーシャルスキルトレーニング)具体実践を紹介しています(※7)。

受講感想紹介

- 現場を知り、子どもたちを知り、そのうえで理論を述べられ、非常に心にしみる講演だった。
- 「無知のまま子どもの前に立つことは失礼極まりない」と書かれた文にふれたとき、自分が何を知らないか、何を知らべきか、そして、何を勉強すべきかを考えねばならないと痛感した。
- 学級づくりが基本中の基本であることを再確認した。
- 「実践だけでは通用しない。理論も必要」との言葉にハッとしました。
- 明日からすぐに生かせる方法がたくさんあった。

【参考文献】※7 曾山和彦「時々オニの心が出る」子どもにアプローチ 学校がするソーシャルスキルトレーニング 明治図書 2010年発行

今回は

ちょうど半分の70分が経ちましたので、ここで10分間休憩にします。休憩後(次回11号)に、「教室でできる特別支援教育」として、教師の構え&具体方策を紹介いたします。



「すぐに役立つ!学級経営の秘訣 第1巻 子ども集団が動く学級づくり」 曾山和彦編集(教育開発研究所)1,890円